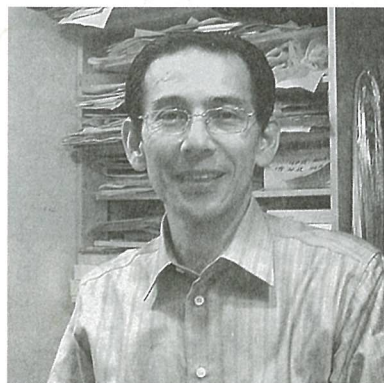


和紙 だより

越前和紙への提言



■山根一城

1950年東京生まれ。法政大学文学部英文学科卒業後、米国留学を経て、外資系企業-ジョンソン(株)、BMWジャパン、日本コカコーラ(株)-のマーケティング・販促・広報責任者、副社長等を歴任。2003年、永年のビジネスマン生活を退き、美学者/礼法研究者であった父-故山根章弘氏の後継者として「山根折形礼法教室」宗主を引き継ぐ。日本古来の折形文化の継承・普及活動の傍ら、和紙産地との交流を通じて和紙文化の復興推進にも取り組んでいる。テレビ、ラジオ、雑誌、講演、セミナーなど出演多数。主著：「折形レッスン」(文化出版局)、「暮らしに使える折形の本」(PHP研究所)。

URL: <http://yamane-origata.com/>

■山根一城さん(山根折形礼法教室主宰) 「本物の和紙でしか伝わらない文化」

●父が残したものの、転身、きつかけ

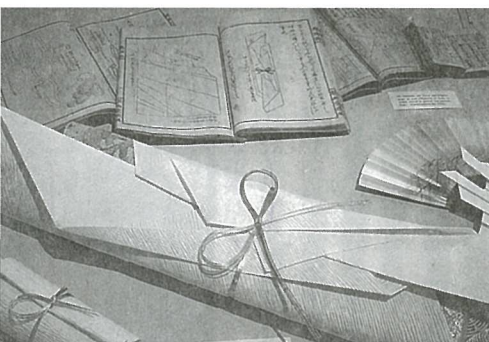
父は、倫理哲学、美学、西洋美術史、英文学などを研究した多彩な学者で、一言で言えば人間の社会や行動の美しさをいろんな切り口から探求しようとした人でした。広い意味での「美」に大変関心があったのです。冠婚葬祭やマナーの分野では第一人者でしたし、日本のアニメーションの創始者でもありました。他にも羊毛の文化誌、映画芸術など、「美」に関係する本も多く書いています。折形礼法の研究もその延長線上で、自宅で三十年以上もお弟子さんに教えていました。教養や品格はお金で買えないよというのが父の口癖でした。それより質素で、心の美しい人の方がよっぽどきれいで、人間としての美しさを持っていると。

私は私でつい最近まで第一線の国際派ビジネスマンで、寝る暇もないくらい多忙な生活に追われていました。FO(投資家向け情報)や危機管理の総責任者という仕事の中で、自分としては現在のアメリカの経済破綻は当時から読めていた。プラスチックマネーで動く不安定な世界に日本も飲み込まれ「世の中、おかしい」という実感がありました。つまり、文明は、効率・量産・革新・新製品・収益率を伸ばすこと。文化は、内部の充実ですが、このバランスが日本はどうも悪いなあと感じていて、今一度価値観を考え直す時期でもあると考えていたのです。七年前父が亡くなった夜、ふと書斎に足を踏み入れ、著書の「日本の折形」を手に取り、読み始めたのです。読み終えて

「これは大変だ！父が四十年かけて集大成したこの素晴らしい文化が日本から消えてしまいう！」と思いました。それでその夜のうちに父の折形礼法教室を継ごうと決断したのです。

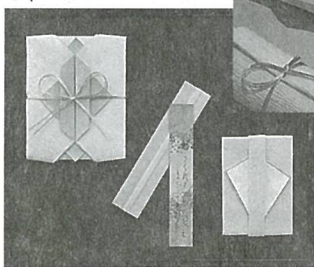
●生き方の美しさを形に表す折形礼法

会社を辞めて二年間集中的に勉強しました。



折形の古文書、室町時代の帯包みの再現作品「ミラノ」で

父が蒐集した山のような折形礼法の古文書・文献を原書から読み始め、父の講義をノートにとつていのお弟子さん



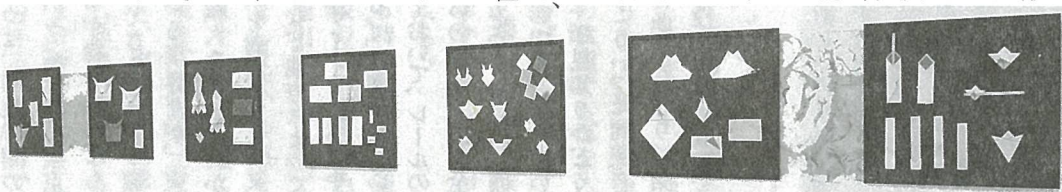
次第にカルチャースクールのプログラムを構築していきました。折形礼法とは、よい人間関係を作るために、ものを送る時、和紙で品物を包む日本古来の美しい文化です。六百年もの歴史を持つ上級武家の間で秘伝として伝えられてきた生き方の美学を形に表したものが、折形礼法です。その原点は、相手のために見えない処で努力して、礼の気持ちを時間にかけて包み、直接渡すというのが真情です。し

かも相手にその努力をさとられないように、一歩退いて「さりげなく」が原則。日本の美徳、美しい心のあり方が自然に形になったものだから、折形は美しくなければなりません。

ミラノ市の現代美術館での展示風景

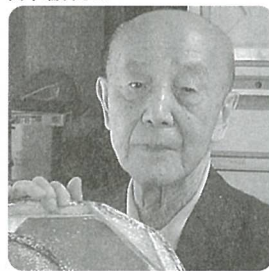


先日ミラノの美術館で、展覧会を開きましたが、博物史・文化史として面白いだけでなく、とにかく美しいと皆さんが口々に言つて下さるのです。口コミでどんどん広がり、美術館開館以来の人手になりました。日本独特のそぎおとした美と言えるかもしれませんが、折る時は1/100ミリ単位の神経を遣つて、重点やカーブの美しさなどを追求します。折形の歴史と文化を時代考証に基づいて体系立てて伝え、それを現代生活に応用し生活に取り入れて欲しいと願つて、教室を運営していますが、自分ではできない仕事です、使命もあり、反応もあるのです。やりがいを感じています。



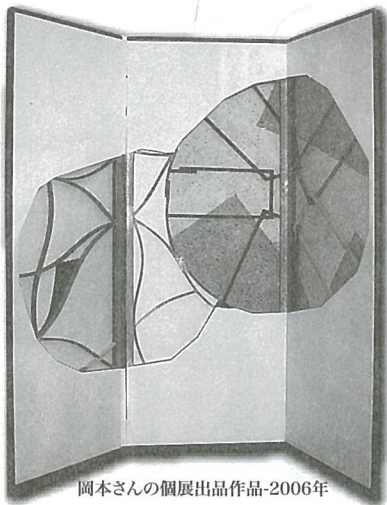
■「職種を繋いで協力する時代」
東京表具経師内装文化協会

専務理事/事務局長を兼任する
岡本瑞石さん



齢は七十才くらい。
「昔この辺りは屋敷町でいいお得意の『お出入り』がいっぱいあったのですが、今はみんなマンションばかりになってしまいました。掛け軸を飾る床の間もなければ、日本間もないから襖の仕事もなくなって…」と岡本さんは振り返る。住宅の洋風化と共に、会員の仕事の構成比も伝統的な表具・表装関係が十五%に対し、インテリア関係が八十五%と変わってきた。年会費は六百円と安い、様々な活動は別会

いる全表連のメリットのひとつは、同業者間の仕事の交流や情報交換だという。例えば、東京の表具屋さんには大阪の仕事が舞い込んで、大阪の同業者に頼むことができる。昔から職人の分業体制で成り立っている業界だが、東京からわざわざ自分の所の職人を連れて行かなくとも、現地で確かな職人を調達できる。又、表具などは江戸風、京都風など地方によってスタイルが微妙に違うが、デザインや仕事のやり方の違いも情報交換できる。「全国組織というのは、いわばレールを引いておいて、レールの上を走る電車は各自思い思いの運転でも、全国どこへでもレールを伝って走っていけば、同業者の交流ができるという影の力を持つています。お仕事を頼む場合でも、顔見知りかどうかではだいぶ違うでしょう。こういった同業者の営業上の交流にも全国各地持ち回りで開催される大会や作品展が役かっているのです。」



岡本さんの個展出品作品-2006年

一昔前までは東京の閑静なお屋敷町だった千代田区麹町・番町地域の一角に東京表具経師内装文化協会(略称「東京表具文化協会」)はある。日本最大の表具業界の組織、全国表具経師内装組合連合会(略称「全表連」)の事務局も併設されており、こちらの運営も永年東京表具文化協会が担っている。表具関係の組織は戦前からあつたが、公式的には昭和二十七年、現在の協会が設立される。昭和五三年には名称も「東京表具経師内装文化協会」に改められ、表具・襖・内装の三つの部門で構成された団体として今日に至っている。現在、会員約四四〇名。全国組織の全表連の方は、約四千名の会員が登録されている。双方の組織の専務理事と事務局長を兼任しているのが岡本瑞石さん、御歳九十七才。今も現役の経師工芸職人だ。創設当初より八〇年余り、当協会に尽くしてこられた。

●公に認定されている多彩な全表連の活動

協会の構成員は、掛け軸、屏風、額、襖等の制作と保存に携わる表具・経師職人、インテリアに携わる内装関係の職人さん達だ。厚生労働省の内容指定でも、糊と紙等を使った表装・壁装などの「貼り作業の行為」と位置づけられている。会員は親方クラスが多いので、平均年

●ネットワークを活かす

沖繩から北海道まで全国をネットワークして

計で運営される。毎年開催の全国大会、隔年開催の全国作品展と技能グランプリ大会、国家資格の一級・二級技能士を選定する技能検定実施、職業訓練校の運営、厚労省が認定する「現代の名工」の推薦作業、叙勲・褒賞候補の推薦など、日本の伝統手工芸の文化を守り、後継者育成のための公的活動は、永年続いているものも多い。毎年厚労省が二百職種、百五十人の中から選ぶ「現代の名工」の中から、常に二〜三人の協会関係者が叙勲に推薦されているから、かなりの高率だ。

●新しい切り口で協力する時代

当協会は東京都公認の職業訓練校の運営にもあたり、後進の育成を行っている。板橋の教室では現在十四人が、表装・内装などを学んでいる。二年間の修学期間を終了すると国家資格二級の学科が免除され、「技能士補」の資格が取得できる。和の



折形制作のデモンストレーションを熱心に見学するミラノ市民

●本物の和紙でしか伝わらない文化
折形礼法というのは、紙の品質を階級によって、目的によって使い分ける世界でも日本だけの最高の紙文化です。檀紙は、天皇や将軍専用紙でそれ以外の人は使えません。又、将軍や大名が決定事項を奉じるための専用紙が奉書紙です。書状の紙と大きさが二目でどういう内容で、誰から来たものが分かる階級社会の門外不出の高度なコミュニケーション文化なのです。ということは、紙は本物を使わないとこの文化は伝わりませんし、和紙の文化にも精通してなければなりません。越前の和紙は歴史もあり、国宝級の方が幾人もいらつしや、私も勉強になります。しかし残念なことに、DTPが得意でないために、まだまだ和紙の魅力が知られていません。それと余りにも高すぎるので、みんなが買えなくなつて結果売れないという悪循環に陥っています。私は教室でお弟子さんが使う手頃な値段の和紙、展覧会などで使用する最高級の和紙、セミナーや講演で話を引き寄せるための和紙など、目的によって和紙を使い分けたいので、産地の方にも新しいオリジナル和紙の開発に協力して頂いています。和紙の魅力は、世界最強の最も優れたエコな記録媒体であると私は宣伝していますが、最高級の洗って再使用できる格の薄様紙の鼻紙が一枚十円しただって、いいと思うのです。そういう価値ある具体例を示してうまく広報していくことが必要でしょう。

インテリアに関心のある若者が、ここで和紙の壁貼りや襖の技術を習得し、住宅業界やインテリア業界に第二の歩を踏み出す人もいる。住宅に日本間がなくなったと言っても、マンションや洋風住宅に新たなセンスで、伝統的な内装技術や和紙を活かしていく余地はあるという。「最近、建築設計者の中にも日本の伝統的な内装を見直し、考えに入れる方もあります。頭を切り換えて、こういう切り口をPRし、素材を提供する和紙の業界や建築家、我々のような素材を活かすようなお仕事と三者で協力してやれるようなことがありそうです。今までは腕で仕事をしてきたけれど、これからは腕と知恵を働かせて、自分の方からお客さんに飛び込んでいって、需要開拓と製品改良をしなければ淘汰されます。しかもセンスにオリジナリティがないといけませんね。」

この協会会員にとっても必要不可欠な素材は今でも和紙。洋紙も使うそうだが、今でも下張りも上張りも八十%は和紙だそう。美濃、小川、土佐、小原、越前、和紙を後加工した型押し、砂子など京・江戸唐紙なども使う。和紙を活かす職種に期待がかかる。

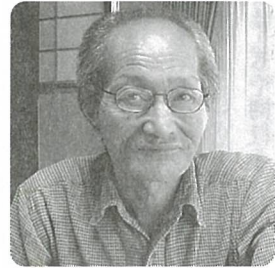


東京都公認訓練校の実習風景

漉き場探訪

■越前檀紙 九代目・山崎吉左衛門さん 「個々の漉き場の基礎体力を強く」

九代目・山崎吉左衛門さん



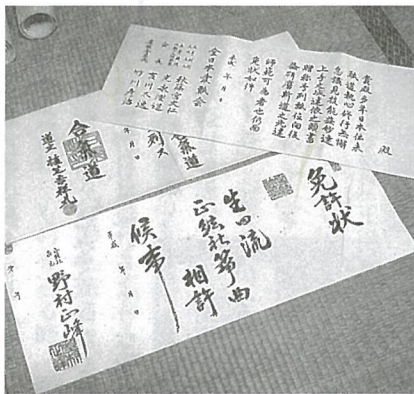
古くは弓を作る材料であったマユミ（檀／真弓）の樹皮を漉いて作られたことに由来する檀紙は、七四六年（天平一八年）の正倉院文書にも既にその名が見られ、生漉き奉書紙と並び、越前を代表する高級和紙である。平安時代には、陸奥国を主産地としたために「みちのくのみゆみ紙」、後に陸奥紙（みちのくがみ）とも呼ばれ、源氏物語や枕草子にも「うるわしく、白く、清い」紙として登場する。平安末期以降、材料には楮が使用されるようになり、独特の縮緬状の「しぼ」を有するようになる。しぼがあることで通気性に優れ、虫食いの害が少ないことから、長期間の記録保存に耐える公家、戦国大名、江戸期の歴代将軍の朱印状などの公文書として使用されてきた。現在、この越前檀紙は、皇室の種々の祭礼儀式用、社寺の高僧就任や日本古来の伝統的諸芸免状用、武道諸流派の最高級免状用、権威ある賞状や感謝状用の紙として広く使用されている。一般の人の目には余り触れることのない、この格式高い越前檀紙を継承しているのが、

九代目・山崎吉左衛門さん。しぼ付けの技法は、極秘技として家族以外には伝えられることはない。奥様、娘さん二人と共に伝

統技法を支え、新たな挑戦に挑む山崎家の檀紙作りへの思いを伺う。

●歴史が育んだ格式

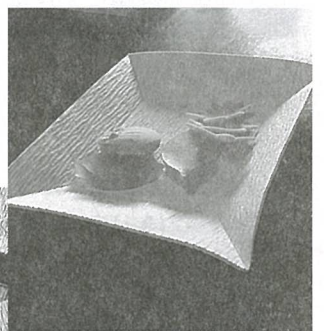
陸奥紙と呼ばれた昔は、しぼもごく浅いものだったようです。しぼを意識的に作るようになったのは、通気性の良さもあると思いますが、同時に公文書としての格式や権威を表現するために、次第に紙自体が派手になったのだと思われれます。中世には、讃岐、備中と共にこの越前が産地として知られていて、今でも確か伊予には手漉き檀紙を漉いておられる所が一軒くらいあるはずです。越前檀紙は私で九代目ということになっていますが、襲名し始めて九代にもよく分かりませんが、現在では、機械漉きの檀紙もあります。うちは勿論全て手漉き。手加工です。手漉き和紙に相当な手間暇がかかる上に、美しく均等なしぼを入れる工程が



檀紙に書かれた免状は通常、薄椀紙に包まれ、桐の箱に入れられる

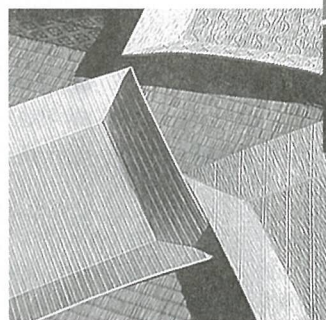
また難しいところです。

しぼの模様が鷹の爪に似ていることから、しぼの深さと大きさによって大鷹・中鷹・小鷹（大高・中高・中低）檀紙があり、皇室の儀式などでは厚手の大高檀紙を用います。うちの紙



最新作の干菓子盆。しぼの表情を活かした淡い色合い。

は、二〇〇六年、悠仁親王がお生まれになった際の「命名の儀」にも使われています。



●新しい需要開拓

普通は漉いた紙を床（とこ）に重ね圧縮して水切りをし、板に張って天日干ししますが、この二つの工程の間に秘技があります。乾燥する前の搾った湿り気のある紙の状態でしぼを入れ、できた紙は室内で吊り下げて乾かします。しぼの模様は、波皺、菱皺、伊達皺、竹縞皺、横縞皺などがあり、しぼは堅牢で伸びることがありません。現在娘に伝授中です。

茶道の領域では、香合を飾る時の敷物「紙釜敷」（香を炊く香合と紙釜敷の柄や重ねの色などで季節や茶会の趣向を演出する道具立てのひとつ）などに使われてきましたが、茶道をなさる方は香道もたしなみますので、香道にも使って頂ける檀紙製品を現在、開発中です。昔からの香道の道具を見ると、檀紙のものがあるので、これは現代に新しい形で提案できると思っております。こういう分野のお客さんは、ものの価値観や美学が分かる人ですので、

付加価値で勝負したいですね。生産できる量も限られた高い紙ですから、低きに走らないように心掛けて、安さ競争に陥らない分野を狙っていきたい。それも待っているだけではダメで、次のネタや試作品を常に持って、お客さんに「こういうのもできます」「こうしたらより素晴らしくなります」と、いわゆる提案営業ができないといけません。小さな漉き場ですが、ここの漉き場だけでどれだけ人の真似できないものを作るか、トコトン考え抜く姿勢が大事です。

●紙一枚の時代は終わった

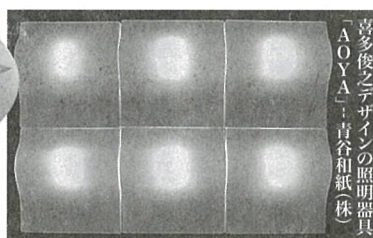
越前は歴史があるだけに、私も含めて各々の漉き場の個性がきつすぎるということは言うでしょうね。一緒になって何かを作り上げようということがなかなかできない。又、貴重な製法技術も公開すると、すぐに他所で真似されたりして、本家より他所の方が安くいいものを作ったりして、競争に負けたというように苦い経験も沢山持っています。デザイナーにいいところだけを持っていかれたりね。(苦笑)。紙一枚の時代は終わったと思います。生の紙だけを売るのはなく、最終製品までやらないと。ひとつひとつの漉き場が勉強して、努力して、考え抜いて、製品を作ることのできる基礎体力を養わなくてはなりません。外からの協力も大いにいいのですが、紙で食っていくのはあくまでこちらの方ですから、主体性を持って信頼関係を構築しながら経営していく能力が必要です。若い四十〜五十代の人は、失敗してもいいから、いろんなことを試してみてもいいから、いろんなことを試してみてもいいから、いろんなことを試してみてもいいから、産地を刺激する触媒の役割を担って欲しいですね。何もしないのが一番いけません。

■JAPANTEX 2008 開催

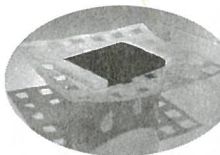
国内外の二五〇社余りのインテリア・ファブリック関連会社が出展する第二七回インテリアトレンドショー(JAPANTEX 2008)が十一月一九日〜二二日、東京ビッグサイトで開催された。今年のテーマは「ネクストデザインインテリアスタイル」。



ニュー障子の提案「SHOJI PAPER」(株)大直



喜多俊之デザインの照明器具「AYOYA」青谷和紙(株)



「奥村食堂」と題されたコーナーに出品された越前和紙作品

この製品は二〇〇八年のグッドデザイン賞・日本商工会議所会頭賞を受賞。因州和紙からは、青谷和紙(株)の出展があり、世界的にも著名なプロダクトデザイナー喜多俊之氏デザインによる和紙の照明器具「AYOYA」シリーズや同社オリジナルの照明が並んだ。越前からは大判の店舗用スクリーン和紙や和紙アート作品が、特設のテーマコーナーに出品された。

■2008 越前和紙ショー! いまだに「和紙の里」開催

十一月二十二日〜二十四日の三日間恒例の「越前和紙ショー! いまだに「和紙の里」が開催されました。これは地域と和紙産業に元気と賑わいを作ろうと三年前から開催されているものです。

前日の雷雨と冷え込みで天候が心配されましたが、開催初日は抜けるような快晴にめぐまれ大勢の人で賑わいました。二日中の長い和紙に子供達が思い思いに絵を描いた「巨大落書きコーナー」や、新そばがらを思いっきり詰めることのできる「そばまくら詰め放題コーナー」では、人だかりができる人気ぶり。又、卯立の工芸館では「王朝文化を支えた料紙展」「山野草と和紙が奏でる日本の美展」の展示、今立生涯学習センターでは、源氏物語千年紀にちなみ、折形礼法研究家山根・城氏による『源氏の恋文』と題する特別講演会を開催。その後、折形教室も開かれ、参加した人達は和紙に託した日本の心に触れ、感心した様子でした。他にもお面作り・織体験コーナー、バザーなど皆さん秋の一日を満喫していただいたようです。



人気の巨大和紙落書きコーナー



お面作りに挑戦

情報欄

●イベント情報

■越前和紙漉き初め式・年賀式

時:平成21年1月5日(月)午前10時30分〜

場所:卯立の工芸館 (越前市新在家町)

和紙産業関係各位および伝統工芸士の皆さんが一同に会し、新年の紙業の繁栄を祈願します。

■福井県「越前・若狭」の物産と観光展

時:平成21年1月22日(木)〜27日(火)

場所:京王百貨店 新宿店7F

展示・即売あり

■伝統的工芸品WAZA2009

時:平成21年2月26日(木)〜3月3日(火)

場所:東武百貨店池袋店 10F

編集後記

今号でご紹介した檀紙の山崎さんから、檀紙に一番書きやすい筆というのを見せて頂きました。何でも、琵琶湖の野ねずみの口ひげ部分の毛を集めて作られたものとのこと。販売店に8本だけ残っていたものの1本だそうです。どんな顔のネズミなのか? いや、たまげました!(よ)